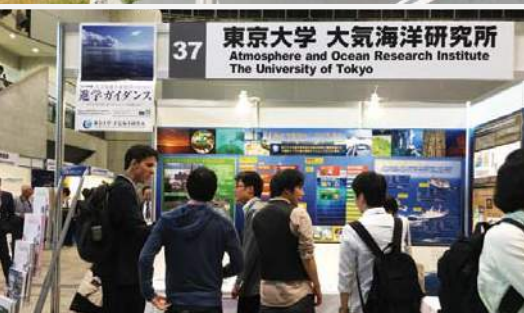


Ocean Breeze

オーシャンブリーズ



2018年2月に竣工した国際沿岸海洋研究センター
研究実験棟(岩手県大槌町)



日本地球惑星科学連合2018年大会



進学ガイダンス



第36回ダブルステニス大会(西脇杯)

特集 国際沿岸海洋研究センター新棟完成!

大気海洋研究所ギャラリー 誌上展示

研究航海レポート

研究人生よもやま話② | 「現代と過去の炭素循環研究」を始めるまで

外国人招へい研究者紹介

新スタッフ紹介

イベントレポート

書き手自身による新刊紹介 | Fish Population Dynamics, Monitoring, and Management

絵でわかる地球温暖化

受賞／人事異動一覧

国際沿岸海洋研究センター新棟完成!

岩手県大槌町の国際沿岸海洋研究センターは、平成23年3月に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けました。昨年より、旧敷地よりも数百メートル高台に新たな研究実験棟・共同研究員宿舎棟(宿泊棟)の建設を進めてきましたが、平成30年春ようやく完成に至り、移転が完了しました。

今回の特集では、新棟の全容と7月20日におこなわれた施設見学、新棟完成記念式典、記念祝賀会の様子をご紹介します。

(広報室)

#1 新棟のご紹介



蓬莱島(ひょうたん島)から望む国際沿岸海洋研究センター旧棟と新棟
新棟は旧棟から数百メートル高台に位置する



震災以降、かろうじて使用可能な3階のみ改修して2018年2月まで使用していた旧棟建物裏手で進行しているのは防潮堤建設工事(2018年3月28日撮影)



研究実験棟とは道を挟んで建つ平屋建ての宿泊棟は、最大35名の受け入れが可能



斜面を利用して建設された3階建ての研究実験棟



研究実験棟入口

エントランスホールの天井に描かれた約8メートルにもおよぶ大作
大小島真木氏制作
[Archipelago of Life 生命のアーキペラゴ]





大きな窓と広い廊下が特徴的な
明るい研究実験棟内
研究機器類の整備は現在も進行中



3階バルコニーから大槌湾を望む 正面中央に見えるのは蓬莱島(ひょうたん島)



共同研究員宿舎棟
(宿泊棟)入口



宿泊室はこの他にファミリールームもある

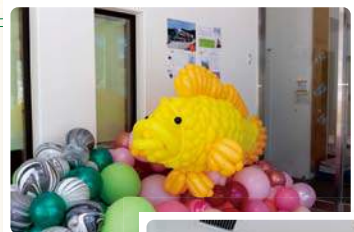


小規模なセミナーなども開催できる広い食堂スペース

#2 施設見学



芸術の観点から海の豊かさ、エネルギーを感じることができるエントランスの天井画



大気海洋研究所出身のバルーンアーティスト、
須原三加氏による作品
アイナメ、カモメ、クジラで大槌周辺の海を表現

#3 新棟完成記念式典・記念祝賀会



三陸花ホテルはまぎくに場所を移し、新棟完成記念式典を挙げる



記念祝賀会にて、大槌町赤浜で受け継がれる「陸中弁天虎舞」をご披露

イーハトーヴの研究センター再開 津田 敦 大気海洋研究所 所長・教授

やっと国際沿岸海洋研究センターは研究棟、宿舍棟の移転・開所を迎えることが出来ました。7年前の震災当初、我々は何から手を付けてよいのか全く分からない状態でした。はじめに背中を押していただいたのは、濱田純一前総長と東大本部でした。震災から2か月という短い間に、電気、水道等の復旧をしていただき旧研究棟の3階部分を使えるようにしていただきました。「お前らはお前らのやるべきことをやれ」と、本当に背中を押していただいた気がします。その後、大槌町からは、移転に伴う数々の調整、文科省からは復興に資する研究をするための「東北マリンサイエンス拠点形成事業」の立ち上げにご尽力いただきました。また、赤浜地区の住民の方々、理解とご支援がなければ、今日を迎えることはなかったと思います。

国際沿岸海洋研究センターは1973年設置の大槌臨海研究センターを前身とし、2003年の改組により現在の形となりました。設立以来、年間2000人日を超える共同利用研究者を受け入れ、幅広い研究分野において、我が国最大規模の臨海施設として沿岸海洋研究の拠点として機能してきました。多くの試資料は津波により流出しましたが、印刷物やデータとして残された論文や資料は、震災による影響

と回復過程を科学的に解明する基盤となりました。その成果は多くの特集号として出版されています。

震災から7年が経ちました。個人として何もできなかったという後悔の念は消えることはありませんが、それに代わって河村センター長らは前を向き、大槌や三陸とともに成長する道を模索しています。我々は震災以降の議論から3つの柱を考えました。

- 1. 地域とともに歩むこと
- 2. 人が交流する場所であること
- 3. 世界を牽引するサイエンスを生むこと

これらのコンセプトは、建物の設計にも反映されていますし、社会科学研究所と共同で行う、「海と希望の学校in三陸」も大きな一歩だと思います。また、最もシンボリックなものは、大小島真木さんの研究棟ロビー天井を飾る天井画と施設見学に合わせて制作していただいた須原三加さんのバルーンアートです。大小島さん、須原さんには、作品の制作だけでなく、2日間にわたり、講演会、ワークショップ、バルーンリリースなど、イベントを盛り上げる数々の活動をしていただき、「地域とともに歩む」、「人が交流する」を強く発信していただきました。

祝賀会のご挨拶の中で濱田純一前総長は、「震災当時、三陸地域の研究・教育施設が

撤退を検討する中、東京大学はこの地でふんばり、地域とともに復興に向けて歩む」といち早く表明されたことをお話しされました。我々は、日々復旧や復興と格闘するなか、震災当時の想いが少し希薄になっていたこと、さらには、今の我々がいかに多くの方々に支えられてきたかを、濱田先生や本田敏秋遠野市長のお話を伺い再認識しました。

宮沢賢治はイーハトーヴ(岩手県)に関してこんなことを書き残しています。「ここでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従えて北に旅することもあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。罪やかなしみさえここでは聖くきれいにかがやいている。」(「注文の多い料理店」広告文より)。大槌町ではまだ多くの方が行方不明です。また、震災前の静かな生活を取り戻せない方々も多くいらっしゃると思います。我々微力ではありますが、地域とともに歩み世界に誇れる海洋研究を発展させることをお誓いするとともに、海洋学を超えて、広い学問分野の方々に利用していただき、学術と地域が連携する拠点となりますよう皆様のお力添えをお願い申し上げます。



大木島氏によるワークショップ



須原氏によるバルーンリリース

※天然ゴム使用の土に還る風船、水溶性紙ひもを使用したリボンを用い、環境に十分配慮の上、行いました。

資源解析分野「タカラガイの世界」

展示期間：2018年4月～6月

タカラガイに関する標本や書籍を無秩序に並べた結果、大航海時代の西欧で流行した驚異の部屋 (Wunderkammer) にも似た展示となった。

- ① ホシダカラ (*Cypraea tigris*) 成員の貝殻標本。様々なサイズの殻を並べた。大きな標本ほど高齢個体の殻であると誤って理解されることが多い。タカラガイはカブトムシなどと同じ決定成長の生物であるため、成熟後のサイズと齢は無関係である。
- ② 国内外の鉱山から産出した方解石とアラレ石の結晶。どちらも炭酸カルシウムを主成分とする鉱物で、展示標本は無機結晶だが、海洋生物の耳石・平衡石、貝殻、サンゴ骨格もこれらの結晶からなる。
- ③ 貝殻を用いた装飾品。太平洋の島嶼国では、タカラガイの殻をつないで作られた小物類や装飾品類が生産され、土産物として輸出されている。タカラガイの貨幣や祭具としての利用は、世界各地で先史時代まで遡る。
- ④ シマダコの液浸標本。シマダコは、沖縄では潮間帯に棲むタカラガイの代表的な捕食者である。貝殻に非常に小さな穴を空けてから中身を食べるという習性を持つ。
- ⑤ 貝殻のX線写真。タカラガイ成員の殻は卵型をしており、外側から眺めても巻貝であることはわかりにくい。X線透過像では、内部に隠された螺旋状の貝殻構造が一目瞭然となる。

(入江 貴博)



海洋無機化学分野

展示期間：2018年7月～9月

海洋無機化学分野では海水中の微量元素・同位体をグローバルな規模で観測・研究しています。海中には自然のサイクルで循環している元素、人間の活動により海に放出された元素など様々な元素が存在しています。近年のクリーン技術の進歩・分析装置の高感度化により、これまで測定が困難であった元素の海洋における分布がようやく明らかになりつつあります。

しかし、海洋の一次生産にとって必須栄養塩である鉄・亜鉛・銅などの金属元素は、その分布や存在状態がまだ十分に明らかにされていません。将来の一次生産の変化を把握

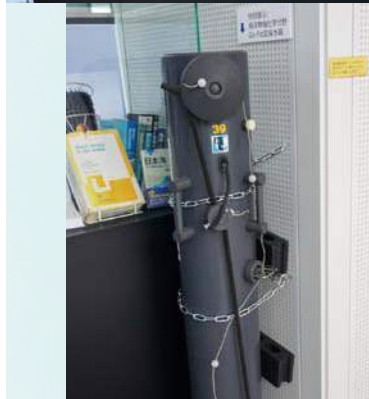
展示全景。什器では「太平洋における海水中的鉄濃度の鉛直断面図」「北太平洋における元素の鉛直分布の周期表」のパネルや様々な採水器の説明などを展示。

するためには必要不可欠な情報です。一方、海水中のネオジム同位体比は過去の海洋循環を明らかにするための指標として使われています。現在の海水中のネオジム同位体の詳細な分布が分かれば、より多くの知見が得られると期待されています。

これらの研究は国際GEOTRACES計画という世界的なプロジェクトの一環として行われており、日本では海洋無機化学分野が中心となって研究を進めています。ギャラリーでは、海洋における微量元素・同位体研究の概要をなるべく分かりやすく説明しました。

(小畑 元)

Go-Flo型採水器



新青丸 KS-18-5次研究航海

観測海域 本州東方沖

航海期間 2018年5月7日～17日

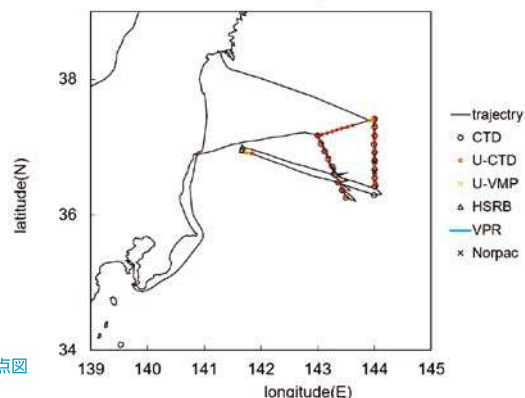
航海の研究題目 黒潮続流域のメソ・サブメソスケール構造とマサバを中心とする魚類群集分布特性

主席研究員 伊藤 進一 海洋生物資源部門 環境動態分野 教授

【 サブメソの世界への挑戦 】

マサバの主産卵場は伊豆諸島付近に形成され、産卵された卵仔魚は黒潮・黒潮続流によって東方へと運ばれ、遊泳能力が高い稚魚になると餌料の豊富な北方の海域へ回遊すると考えられてきました。しかし、流れの強い黒潮続流からどうやって北方の海域に脱出するのか不明でした。これは、黒潮続流周辺ではサブメソスケールと呼ばれる数～数十kmの複雑な構造が発生と消滅を繰り返しており、激しい変化に対応した魚類のネット採集が困難だったためです。今回、初めての試みとして、海水中に含まれる魚類から排出されたDNAの情報(OceanDNA)をもとに分布を調べ、海洋のサブメソスケールとの対応を解析する方法に挑みました。現在OceanDNAの解析中ですが、初挑戦のため、結果が楽しみです。(伊藤 進一)

KS-18-5 observation points



航跡/測点図



海水中に含まれる魚類DNAサンプル(OceanDNA)ろ過の様子



動物プランクトンの分布を調べるVideo Plankton Recorder投入の様子

新青丸 KS-18-7次研究航海

観測海域 房総沖

航海期間 2018年7月16日～19日

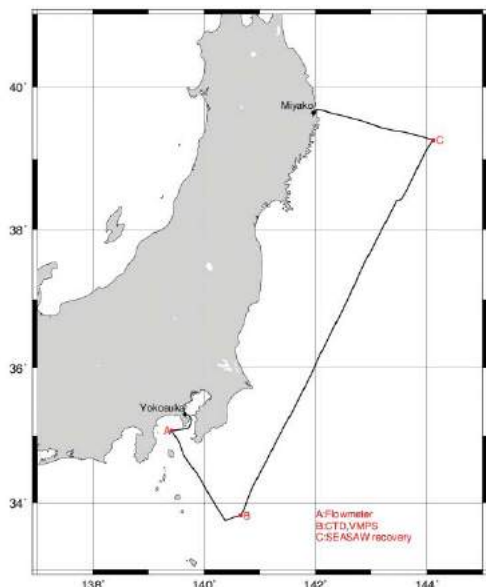
航海の研究題目 共同利用研究航海のための観測機器の性能確認試験

主席研究員 岡 英太郎 海洋物理学部門 海洋大循環分野 准教授

【 新青丸試験航海への同乗 】

ほぼ初めての研究船への乗船となった海洋大気力学分野の私と学生3名にとって、4日間という短い航海の期間でしたが、研究船での生活や作業などを一通り体験する貴重な機会となりました。観測推進室・船員の方々にお世話になり、甲板での採水等の作業の解説や、新青丸の最新鋭の設備の紹介などを丁寧にしてくださり、食事や空き時間に交流を深めることができました。海況は航海期間を通じて極めて良く、

初心者にとっては大変助かりました。乗船前の不安は払拭され、全員ほぼ普段通りの生活ができました。(伊藤 純至)



航跡/測点図



採水作業の様子



ウインチ引き揚げを見守る

新青丸 KS-18-8次研究航海

観測海域 三陸沿岸

航海期間 2018年7月22日～30日

航海の研究題目 巨大津波による三陸沿岸生態系の擾乱とその回復過程に関する研究

主席研究員 永田 俊 海洋化学部門 生元素動態分野 教授

【大槌湾で集中観測を実施しました】

東北マリンサイエンス拠点形成事業では、新青丸を用いて、震災後の三陸沿岸生態系の調査研究を総合的に推進しています。本航海では、2012年度から継続している定点観測に加えて、大槌湾口付近での集中観測を実施しました。これは、新青丸での湾外観測と、国際沿岸海洋研究センターの船艇「弥生」による湾内観測を連携させる初めての試みです。幸い海況にも恵まれ、水温・塩分や生物化学成分の詳細な分布を調べることができました。今後、この観測で得られたデータを使って、大槌湾の海水交換の仕組みや湾内外の生態系の維持・変動機構の解明を進めます。本航海の様子は、東北マリン広報誌「メニュー通信」に特集記事として掲載予定ですので楽しみに。（永田 俊）

航跡／測点図



大槌湾の湾口に集結した弥生(左)と新青丸(右)。このあと弥生は湾内を、新青丸は湾外を航走し、沿岸—外洋移行域の物理・化学・生物特性を詳細に調べました。この集中観測によって、大槌湾の海水交換の実態や生態系の維持・変動機構についての理解が深まることが期待されます。

研究人生よもやま話 ②

「現代と過去の炭素循環研究」を始めるまで

川幡 穂高 海洋底科学部門 海洋底環境分野 教授

海底で高温の熱水噴出が発見されたのは、私が修士2年生の時、これは「世紀の発見」と言われた。1985年のAGU (American Geophysical Union)のFall Meetingでも、関連するすべてのセッションで、部屋から人が溢れていた。その後、このような光景はまれにしか見えない。さて、熱水は若い海洋地殻内の海底下1~2kmで作られるので、ここでの物理・化学的なプロセスの理解が熱水研究の本質的な部分となる。そこで、博士過程では、国際深海掘削計画で採取された世界で最も深く海洋地殻を掘削したガラパゴス海嶺の504B コア試料(深さ0~1.1km)を分析した。最下部の鉛直方向460m長の岩石が200-320℃で反応し、その組成は熱水噴出孔の熱水組成と類似していたことがわかった。堆積物の下の海洋地殻(岩盤)はとても硬い。ダイヤモンドをまぶした特殊な装置で掘削するので、高価となる。この深さまで掘削するのに3航海(6ヶ月)が費やされていた。1984年から通商産業

省地質調査所(現 産業技術総合研究所)に勤務し、1985年に熱水鉱床の研究をするためにカナダのトロント大学でポスドクの機会をいただいた。この504B掘削孔をさらに深く掘る111航海が1986年9-10月に実施され、これに参加した。海洋地殻は上から枕状溶岩層(0.5~1km)、シート状岩脈層(1km)、ハンレイ岩層(4km)から構成され、モホ面に到達すると、その下はマントルとなる。当初、本航海ではハンレイ岩層に達すると予想された。しかし、掘削してみると予想外に難航し、わずか0.2kmしか掘り進めず、岩盤は破碎され、回収率も10%と惨憺たるものであった。航海はヘルで終了し、マチュピチュの遺跡やチチカカ湖を観光して、トロントに戻り、「この後どうするか?」と迷った。結論は、「この状況の原因は掘削技術の限界で、ハンレイ岩層に達するには今後20年を要する。自分はサンプルなしに50歳を超えてしまう」、「十年弱の熱水テーマをやめて、心機一転、未知だが、低温の水が

関与する『環境研究』に大転換しよう。トロント大学から帰国し、地質調査所に帰り、科学技術庁で1年間の出向勤務をした後、「現代と過去の炭素循環研究」を始めた。すでに35歳だった。なお、深海掘削計画がハンレイ岩層に到達した時、私は51歳(2006年)になっていた。

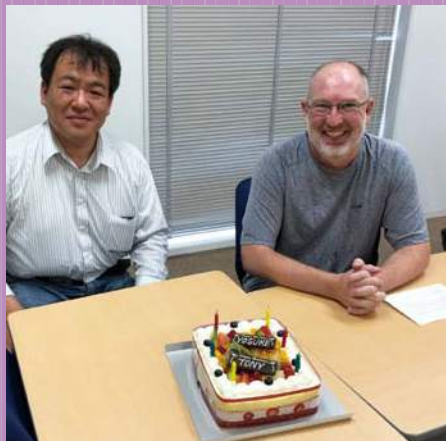


111航海の掘削船上の乗船者たち。自分も含め、皆若かった



〔外国人招へい研究者紹介〕

国外から大海研にお招きした、招へい教員・研究者の皆さまを受入教員のコメントと共にご紹介します。



滞在中に誕生日を迎えたパーセル先生とケーキ。

Anthony Patrick Purcell (アンソニー・パトリック・パーセル)

オーストラリア国立大学 地球科学研究所 リサーチフェロー

研究課題：過去14万年間の海水準変動モデルと観測比較

招へい期間：2018年4月1日～6月30日

受入教員：高解像度環境解析研究センター 環境解析分野 教授 横山 祐典

大気海洋研究所が幹事を務めています、東大との戦略的パートナーシップ校であるオーストラリア国立大学の地球科学研究所から、3ヶ月の日程でPurcell先生を招聘しました。数学がバックグラウンドであることを生かした氷床や地球物理モデルを使った気候変動や南極氷床変動研究で有名な研究者で、今回も高解像度センターで進めている古気候の研究の共同研究を実施するための来日でした。囲碁が趣味(腕前は6段)で歴史や文化にも興味を持っていることもあり、教授会の挨拶を全て日本語で話されました。学生やポストドクとの共同研究やセミナーで交流を深めるとともに、日本での学会でも研究発表されました。週末は東京に出かけ、日本棋院で囲碁を楽しまれました。(横山 祐典)

Ryan Rykaczewski (ライアン リコツキー)

サウスカロライナ大学 地球海洋環境学部 助教

研究課題：数値モデルを用いた世界のマイワシ、カタクチイワシ属の生活戦略の比較研究

招へい期間：2018年7月10日～8月10日

受入教員：海洋生物資源部門 環境動態分野 教授 伊藤 進一

Ryan Rykaczewskiさんは、1ヶ月という短い期間でしたが、北太平洋のカタクチイワシの東西比較に関する研究計画の議論、卵仔稚データを用いた共同解析を実施しました。魚柄のアロハシャツをこよなく愛する気さくな方で、研究室の全員と個別ディスカッションをしてくれました。同時期に来所されたKenny Roseさんも交えた投扇大会、分野メンバーとの卓球大会にも参加され、また手賀沼花火大会も鑑賞され、猛暑の日本の夏を堪能されました。(伊藤 進一)



歓迎会後に分野メンバーと



分野メンバーとの卓球大会



研究室での様子

陳 光華 (CHEN Guanghua)

中国科学アカデミー 大気物理研究所 教授

研究課題：台風発生時の対流・層状雨の時空間分布と時間発展についての研究

招へい期間：2018年7月1日～12月31日

受入教員：気候変動現象研究部門 気候データ総合解析研究分野 教授 高藪 縁

Guanghua Chen先生は、中国科学アカデミー・大気物理研究所より来日され、7月1日から年末まで6ヶ月間滞在されています。ご専門は台風と熱帯波動で、最近では、非常に強い台風の眼の壁雲の構造と降雨特性との関係性を明らかにされました。2度目となる今回の招へいでは、台風発生と降水、熱帯のマルチスケール循環の役割について、衛星データ解析と数値シミュレーションをツールとして共同研究を行う予定です。

にこやかで親しみやすいお人柄です。バドミントンの名手で、柏の葉のチームで練習されているそうです。卓球も上手とのこと、大会が楽しみです。(高藪 縁)



歓迎会にて

新スタッフ紹介

最近着任したスタッフを紹介します。①氏名、②所属、③こんな仕事をしています、④ひとこと



- ①伊藤 純至(いとう じゅんし)
- ②海洋物理学部門 海洋大気力学分野 助教
- ③ラージ・エディ・シミュレーション(LES)とよばれる高解像度の数値計算により、様々な大気現象を再現し、微細な構造を解明する研究を行っています。

④海洋研(当時)に進学してから10年以上が経ちました。中野・柏とも研究所にテニスコートが隣接する環境を活かし、テニスをやってきました。AORIテニスクラブで一緒にしましょう!



- ①佐藤 克憲(さとう かつのり)
- ②国際沿岸海洋研究センター(大槌)事務室係長
- ③国際沿岸海洋研究センターに関する総務・会計関係、具体的には教職員の勤務時間管理、予算執行・経理調達管理、宿泊棟運用管理などを行っています。写真は宿泊棟の入口から中庭方向を撮ったものです。
- ④本年3月で廃止となりました、同じ岩手県内の本学東日本大震災復興支援拠点から異動してきました。これまで経験したことのない業務を担当しており御迷惑をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします。



- ①高木 俊幸(たかぎ としゆき)
- ②海洋生命科学部門 分子海洋生物学分野 助教
- ③人間がバクテリアやウイルス感染によって風邪を引くのと同じように、海洋生物にも様々な病気が存在します。特に刺胞動物であるサンゴを対象として、バクテリア感染が引き起こす病気発症メカニズムとそれを防御する免疫機構を研究しています。

④趣味はダイビングと旅行です。柏は少し海から遠いですが、これから房総や伊豆などのダイビングポイントを開拓していきたいと考えています。写真は研究のフィールドである沖縄県瀬底島のサンゴ礁です。



- ①中川 美和(なかがわ みわ)
- ②共同利用共同研究推進センター 観測研究推進室 技術職員
- ③白鳳丸・新青丸に乗船し、共通観測機器の運用や観測支援を行います。陸上では観測機器棟にて観測機器の整備・調整を行っています。主にCTD・採水器関連の観測機器に携わっています。

④趣味は掃除と美味しいコーヒーを飲むことです。昨年度まで愛媛大学で瀬戸内海をメインフィールドとして現場観測をおこなっていました。写真はよく観測で行っていた佐田岬です。まだまだ覚えることはありますが、早く皆様のお役に立てるよう頑張ります。よろしくお願いいたします。



- ①渡邊 仁之(わたなべ ひとし)
- ②事務部 事務長
- ③事務長をしております。
- ④本年度前半のメインイベントは、7月20日に行われました国際沿岸海洋研究センター新棟完成記念式典になるでしょう。式典は学内外から160名にご出席頂き、盛大に開催できたことに感謝いたします。そして、所内の皆様のご協力にお礼を申し上げます。写真は、南米アタカマでの1枚です。



- ①松峯 正典(まつみね まさのり)
- ②事務部 財務チーム 係長
- ③所の予算に関する業務を主に、決算と監査も担当しております。
- ④柏にはかれこれ30年ほど住んでおり、念願が叶い柏キャンパスでの勤務となりました。休日はヨガをしたり、イラストを描いたりして過ごしています。昼休みにヨガをしてみませんか?



- ①シェリフ多田野 サム
- ②地球表層圏変動研究センター 古環境変動分野 特任助教
- ③今よりも昔の時代の気候変動を研究しています。主に、数値モデルを用い、過去の時代の気候変動をシミュレートし、そのメカニズムの理解を目指しています。
- ④生まれも育ちも福岡県福岡市、生粋の博多っ子です。もちろん、福岡ソフトバンクホークス(野球)を応援しています。学部時代はアメフト部に所属しており、最近をよくサッカーをしています(写真：上段右から2人目)。



- ①佐野 浩幸(さの ひろゆき)
- ②事務部 外部資金チーム 係長
- ③外部資金の受入、報告などの諸手続き、経費執行の管理などを行っています。現在の担当は、科学研究費助成事業(科研費)、東北マリンサイエンス拠点形成事業などです。まだ詳しくはありませんが、困ったことなどお気軽にご相談ください。

④双子の父親業に日々いそいでいます。この原稿を書いている現在は夏休みで、学童に通う子どもの弁当作りが毎朝の日課兼趣味になっています。完食してくれるとご機嫌、残されるとしょげています。写真：双子一時々間違えますー

- ①正藤 邦明(しょうとう くにあき)
- ②事務部 外部資金チーム 係長
- ③外部資金(受託研究・補助金など)の申請及び受入処理、完了報告、分担機関との連絡調整などを担当しています。
- ④外部資金関係は10年以上前に医科学研究所にいた時以来で、当時とは異なる部分も多く日々勉強中です。趣味は旅行で、年1回のペースで海外に行き刺激を得ています。写真は昨年に行ったベルリンの壁近くの風景。



- ①佐藤 嘉昭(さとう よしあき)
- ②事務部 施設・安全管理チーム 専門職員
- ③建物の保守・維持管理を中心に、最近は沿岸センター(大槌)の工事監理をしています。
- ④趣味はマラソン。記録更新が目標のはずが、最近はダイエット目的になってます(泣)写真は、8月のスキー場で開催された「ゲレンデ逆走マラソン」。トレーニングのつもりが、なぜか子供と競ってるし…(よその子です)



- ①佐藤 悠(さとう ゆう)
- ②事務部 財務チーム 一般職員
- ③会計業務の中で、特に決算と監査対応を担当しています。1日平均50~60件の書類に目を通すので、仕事が終わる頃には目がショボショボになっています。帰り道にはキャンパスの自然を見て疲れ目を癒す、そんな毎日です。
- ④趣味でエレキベースを演奏します。最近は何となく練習の時間が取れませんが、時々友人と時間を合わせてバンドを組んで楽しんでいます。

Event Report

イベントレポート

日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2018年大会における大気海洋研究所ブース出展報告

2018年5月20日(日)～24日(木)に幕張メッセにて開催された日本地球惑星科学連合2018年大会において、大気海洋研究所ブースを出展しました。研究所紹介、研究トピックスなどのポスター展示、ピノスガイ試料や表層柱状採泥器の展示、進学案内ほか各種資料配布を行いました。

ポスター：研究所の紹介(組織、教育、研究、全国共同利用)、国際沿岸海洋研究センター紹介、四船公募紹介、研究トピックス紹介(東北マリンサイエンス、海洋底科学、気候変動研究等)

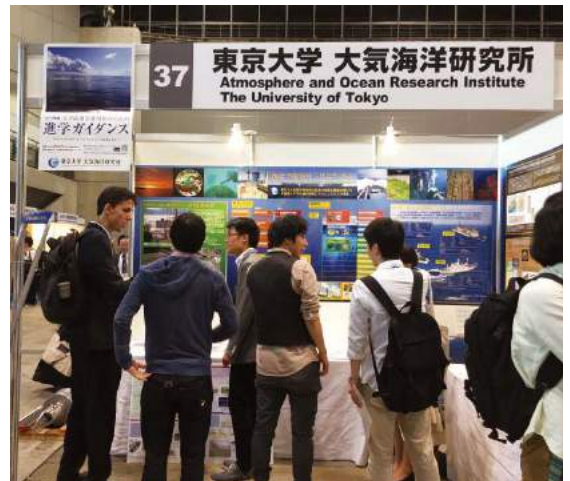
展示：ピノスガイ試料、表層コアレプリカ、表層柱状採泥器

配布物：大気海洋研究所要覧、『メーユ通信』、『Ocean Breeze』、進学ガイダンス案内、新領域創成科学研究科入試案内など

(黒田 潤一郎)



ピノスガイ実物試料と解説記事



展示ブース全体風景



多くの参加者で賑わう、ポスターパネルを用いた説明

進学ガイダンス開催

2018年5月27日(日)に、進学ガイダンスを開催しました。最初に講堂において大気海洋研究所と各部門・センターの紹介・入試案内等の全体的な説明を行った後、講義室でのポスターパネルを用いた各研究室の紹介と研究室訪問を通して、参加者と教職員・大学院生が交流しました。大学院入学者が減少傾向にあるなか、進学ガイダンスのあり方についても再検討を進めており、今年度は11月11日(日)にも後期ガイダンスを開催予定です。大気や海の研究に興味を持った学生がたくさん入学してくることを楽しみにしています。(伊藤 幸彦)

Blues Night at Kashiwa

6月2日、「お魚倶楽部はま店頭広場」(大海研玄閣脇)で、第3回 Blues Night at Kashiwaが開催されました。昨年同様お天気に恵まれ、爽やかな気候のもとオープンエアライブが繰り広げられました。何組ものプロのミュージシャンによるブルース、地元の「超新進気鋭」ドラマーの演奏、キャンパス関係者を中心とするバンドによるポップス、そして出演者全員による「スタンド・バイ・ミー」の即興ジャムセッション…。美味しいおつまみや多彩な飲み物とともに、今年も楽しいひと時を過ごさせて頂きました。来年も是非開催をお願いしたいです。そして、当研究所からも誰か出演できるといいですね。(井上 広滋)



歌唱力に圧倒されます



2日目の公開市民講座「岩手のサケを知る」の様子

「さーもん・かふえ2018」開催

6月8～9日に盛岡市で「さーもん・かふえ2018」が開催されました。孵化場関係者を対象とした初日は、各道県の資源動向について報告があった他、餌料の比較、感染症防除方法などの具体的な技術について、現場の方が互いに情報交換・議論しました。2日目の公開市民講座「岩手のサケを知る」では、民俗学的視点から見たサケと人の関わり、他、資源情勢、母川回帰や自然産卵などの生態、それらを活かしたサケ増殖の取り組み、鳥類による稚魚の捕食など、岩手のサケについて様々な話題提供がありました。サケ資源は厳しい状況が続いていますが、三陸サケの価値を見直し、孵化場関係者と市民、研究者が一緒になってサケを盛り上げていければと思います。（峰岸 有紀）

気候さいえんすCafé「異常気象の考え方(その参)」

第3回目は、2018年6月15日(金)16時からいつもの東大柏の葉キャンパス駅前サテライト1階サロンスペースで実施しました。毎回、トピックはそのときの気分で選んでいます(もちろんお客さまの興味の範囲で)。今回は、地球温暖化について色々なところでお話しするときに、ちゃんと伝わっているのかしらと思うことの多い「ゼロエミッション」の話から始めました。緩和を話せば、適応にも触れた方がよいので、極端気象と温暖化の関係や、近年の「イベントアトリビューション」研究の考え方なども紹介しました。と、言う説明では術語がわからないと思いますが、イベントにお越し頂ければ、よくわかるようになるシステムとなっております。恒例のギター演奏も正規時間に一切割り込むことなく、開演前にさりげなく、つつがなくやらせて頂きました。（木本 昌秀）



今回は開場前の会場のようすを。駅から10秒。早く来ると無料で珠玉のギター演奏が楽しめます。

たくさんの願い事が吊るされた笹竹



お子さんと共にお祝いの花束を受け取る青木助教

青木かがり助教受賞祝賀会と七夕イベント

顕著な研究業績をあげた若手研究者をたたえる「平成30年度文部科学大臣表彰若手科学者賞」を受賞された行動生態計測分野 青木かがり助教の受賞祝賀会が、7月6日(金)に大海研1階エントランスホールで行われ、約50人の出席者で喜びを分かち合いました。祝賀会は津田所長の挨拶に始まり、6月25日(月)から開催されていた七夕イベントの最終日だったこともあり、小さなお子さんも多く参加する大変アットホームな雰囲気で行われました。青木さんの受賞コメントにもありましたが、この度のご受賞は所内の若手研究者の皆さんの励み・大きな目標となることでしょう。祝賀会・七夕イベントにご協力いただいた皆様には、この場を借りて御礼を申し上げます。（高木 互）

参加者全員集合!



第36回ダブルステニス大会(西脇杯)開催

AORIテニスクラブは、厚生委員会の後援のもと7月15日(日)に第36回ダブルステニス大会(西脇杯)を開催しました。西脇杯は旧海洋研究所の第4代所長の西脇昌治教授により1975年に始められた伝統ある大会です。当日は厳しい暑さとなりましたが、日頃の練習の成果を発揮し、全ペア5試合を戦い抜きました。4勝を挙げた大木(OB)・小林(海洋システムモデリング研究分野)組が優勝(筆者念願の初優勝!)、準優勝は竹井(OB)・伊藤(海洋大気力学分野)組でした。当テニスクラブは、初心者から熟練者まで幅広いメンバーで火曜・金曜の昼休みを中心に活動しています。参加者をいつでも募集していますので、お気軽にコートにお越しください!!!（小林 英貴）



渡部会長から笑顔でトロフィーを受け取る大木・小林組



Fish Population Dynamics, Monitoring, and Management

Ichiro Aoki, Takashi Yamakawa, Akinori Takasuka (編)
15.5×23.5cm・245ページおよびKindle版・
17,702円 (Kindle版17,814円) (税込)
2018年6月・Springer 刊

本書は日本水産学会が監修するFisheries Science Seriesの第3弾である。大きく3つのパートに分かれ、Part 1では小型浮魚、底魚(スケトウダラ)、サメ類の生物過程・海洋環境と資源変動の関係について、Part 2では生物採集調査・音響調査に関する最新の観測手法と資源評価手法、Part 3では漁獲制御規則と生態系モデルについて述べられている。私はこのうち資源評価手法に関する章を担当した。水産資源学や水産海洋学に関する書籍は幾つかあるが、日本の研究成果にも十分に触れられつつまとめられているのが特徴である。紙媒体だけでなく電子書籍としても刊行されているが、残念ながらどちらも高額である。図書室や研究室に入ったら目を通していただきたい。
(平松 一彦)

絵でわかる地球温暖化



渡部雅浩 (著)
A5判・191ページ・2,200円 (税別)
2018年6月・講談社 刊

地球は本当に温暖化しているのか? 何が温暖化をもたらすのか? 温暖化は何をもたらすのか? 現代科学が明らかにした温暖化のメカニズムを、豊富なカラー図版とともに平易に解説。人間活動が起こす気候変化の科学的なしくみがよくわかる!
(渡部 雅浩)

永田 俊 教授

海洋化学部門 生元素動態分野
2018年度 日本海洋学会賞
[2018年5月]

受賞題目: 海洋における微生物・ウイルス群集の炭素・窒素循環における役割に関する研究 受賞者表彰式にて



伊藤 幸彦 准教授

地球表層圏変動研究センター 海洋生態系変動分野
2018年度 日本海洋学会日高論文賞 [2018年5月]

Itoh, S., H. Kaneko, M. Ishizu, D. Yanagimoto, T. Okunishi, H. Nishigaki, and K. Tanaka (2016): Fine-scale structure and mixing across the front between the Tsugaru Warm and Oyashio Currents in summer along the Sanriku Coast, east of Japan, *Journal of Oceanography*, **72** (1), 23-37.
受賞者表彰式にて(右端)



受賞

横山 祐典 教授

高解像度環境解析研究センター 環境解析分野
AOGS 2018 (15th Annual Meeting - Asia Oceania Geosciences Society) "Interdisciplinary Geosciences Section Distinguished Lecture" [2018年6月]

Timing is the Key to Understand What Lies Beneath : Recent Developments in Geochronology Untangle Mysteries in Fields from Past Climate Changes to Geohazards



木本 昌秀 教授

気候モデリング研究部門 気候システムモデリング研究分野

気象庁長官表彰 [2018年6月]

多年にわたり異常気象分析検討会会長として気候情報の社会に向けた発信に尽力するとともに防災意識啓発および気候・気象情報の利活用促進など多様な気象業務に対する社会的理解の促進に寄与した功績



吉澤 晋 兼務准教授

地球表層圏変動研究センター 生物遺伝子変動分野
日本微生物生態学会第32回大会
Best Presenter Award [2018年7月]

受賞題目: To use light or to avoid it? Light-adaptation strategies in marine Flavobacteria



左から2人目

人事異動一覧

*H30.6~H30.10

*特任研究員、学術支援職員、技術補佐員、事務補佐員については省略

□ 教員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名(本務所属・職名)
H30.7.1	濱崎 恒二	昇任	海洋生態系動態部門 微生物分野	教授 海洋生態系動態部門 微生物分野 准教授
H30.8.1	Matsuzaki Kenji Mare Raymond	採用	海洋底科学部門 海洋底環境分野	助教
H30.9.1	小路 淳	採用	海洋生物資源部門 資源解析分野	教授
H30.10.1	佐野 有司	配置換	附属高解像度環境解析研究センター 環境計測分野	教授 海洋化学部門 大気海洋分析化学分野 教授
H30.10.1	吉森 正和	採用	気候システムモデリング研究部門 気候システムモデリング研究分野	准教授
H30.10.1	矢萩 拓也	採用	海洋生態系動態部門 底生生物分野	助教

□ 職員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・職名	旧所属・職名
H30.6.30	山岸 由尚	転出(出向)	政策研究大学院大学 財務マネジメント課	主査 外部資金チーム 係長
H30.6.30	谷垣内 卓也	転出(出向)	国立天文台 財務課司計係	係長 財務チーム 係長
H30.7.1	正藤 邦明	転入(在籍出向・復帰)	外部資金チーム	係長 情報システム研究機構 財務課決算・経理係 係長
H30.7.1	佐藤 悠	転入(配置換)	財務チーム	一般職員 宇宙線研究所 総務係 一般職員

□ 国内客員教員

委嘱期間	氏名	所属・職名	本務先・職名
H30.10.1~H31.3.31	齋藤 和雄	海洋物理学部門 海洋大気物理学分野	客員教授

□ 外国人客員教員

委嘱期間	氏名	所属・職名	本務先・職名
H30.7.1~H30.12.31	Chen Guanghua	気候変動研究部門 気候データ総合解析研究分野	特任教授 中国科学院 大気物理研究所 リサーチ・フェロー

